

## 第二室戸台風の体験談収集とパネル展を通じた市民啓発

徳島大学環境防災研究センター 中野 晋  
徳島県南部総合県民局 徳永 雅彦  
徳島県危機管理環境部 ○ 廣瀬 幸佑  
徳島県防災人材育成センター 越智 貴亮

### 1. はじめに

昭和36年9月16日に室戸岬から淡路島を経て、近畿地方を抜けた台風18号は、規模や進路が室戸台風と似ていたため、第二室戸台風と名付けられ、徳島県や関西地方を中心に多大な被害をもたらした。

特に高潮については、本県に記録的な浸水被害を残したが、年数が経過したことから、当時の体験談を語る者も少なくなっており、大雨のみによる洪水や地震・津波の災害と比較すると、県民の意識も薄くなっていると感じた。また、第二室戸台風から60年の節目の年となることから、改めて、過去の資料や体験談を収集・整理し直してパネルにし、パネル展を開催することで、県民への啓発を行った。



図-1 第二室戸台風の進路・気圧・雨量・風速  
(徳島県自然災害誌(2017年3月), 大阪管区気象台  
報告書(1962年)等のデータを用いて作成)

### 2. 第二室戸台風の概要<sup>1)</sup>

昭和36年9月16日午前9時過ぎに室戸岬の西方に上陸し、その後、徳島県内を、日和佐から和田島に抜け、正午頃に淡路島へ上陸した後、関西方面へと進んだ。室戸岬に上陸時の気圧は、気象庁が統計を開始した昭和26年以降で最も低い925hPaを記録し、徳島県に上陸した時点でも930hPaと低気圧を維持していた。

徳島県内には14日午後から雨が降り始め16日の台風が通過するまで降り続き、木頭では1,160ミリを記録した。風も強く、徳島市での観測で、最大風速は10時20分に南東の風27.5m/s、最大瞬間風速は10時13分に南東の風38.0m/sだった。

特に沿岸部の被害の原因となったのが記録的な高潮で、小松島港では満潮時より1時間49分遅れて台風が通過したが最高潮位は4.23mを記録し、最大偏差は1.93mと最高の記録となった。

吉野川中流以下と日和佐町以北の4市21町に災害救助法が出され、被害が特に大きかった市町村の被害戸数の全戸数に対する割合は、吉野町で84%、徳島市・松茂町・市場町で81%、上板町で72%であった。徳島県内で死者11名、重傷20名、軽傷233名、全壊569戸、半壊1,777戸、床上

---

Collecting the experience stories for the Second Muroto Typhoon and enlightenment of disaster prevention consciousness through a panel exhibition. Susumu Nakano (Tokushima Univ.) , Masahiko Tokunaga, Kousuke Hirose and Takaaki Ochi (Tokushima Pref.)

表-1 徳島県内の被害状況

	徳島	鳴門	小松島	阿南	勝名	那賀	海部	板野	阿麻	美馬	三好	計
死(人)	1人				1			3	3	1	2	11
傷	17	15	14	9	12		5	155	20	6	-	253
全(家)	118戸	93	5	13	43	3	17	175	50	41	11	569
沈没	34	5				2		7		2	3	53
半	353	269	28	85	124	20	96	499	109	146	48	1777
床上	13867	3284	2573	654	376	172	287	2158	1548	344	50	25313
床下	20864	13993	11274	2702	1734	158	621	4987	5662	614	334	62943



図-2 徳島県内の浸水箇所

浸水 25,313 戸，床板浸水 62,943 戸と，広範囲で多大な被害であった..

### 3. 当時の被災状況や体験談の情報収集

日本防災士会徳島県支部や沿岸市町の防災担当者等を経由して，当時の体験談についてお話しただけの方を募集し，本人からヒアリングを行った。

また，県立図書館や文書館の昔の資料を調べるとともに，報道機関や国土交通省，体験者等から当時の資料をご提供いただき，情報収集と整理を行った。また，それによって得られた潮位や浸水等のデータと，国土地理院の当時の地形データから，解析ソフトを利用し，松茂町・徳島市・小松島市の3市町について，当時の地形を用いた高潮氾濫解析を行い，解析から得られた最大浸水深分布図に体験談等の当時の状況を図示した。

### 3.1 松茂町

(1) 松茂町長原 S.K.さん（当時34歳）の体験談（図-3-①）

昼前に長原の南端に住んでいる Si さんが、「うちの裏の堤防が切れたから水が来る」と言いながら家の前を通った。

その後、ちょろちょろと水が来たので、小学校1年生と3年生の娘と裏の Ha さんと一緒に、100mほど北にある鉄筋2階建の Hi さん宅へ向かった。Hi さん宅へ入る直前に、裏（漁港側）の堤防が切れ、横から一気に水が押し寄せてきて、胸下くらいまで浸水した。その水の勢いで子供の手を引いたまま回転した。その時に手を放していれば、子供は命の危険にさらされていただろう。1mほど浸水し、畳や着物等は濡れたが、買ったばかりのテレビだけは急いで、2階に上げて無事だった。幸いなことに、近所でけが人はなく、つぶれた家もなかった。



写真-1 決壊した堤防（松茂町長原 図-3-②）  
（松茂町長原，待田様提供）

### 3.2 徳島市

(1) 徳島市北沖洲1丁目 A.K.さん（当時中学3年生）の体験談（図-4-③）

当時は城東中学校3年生で、中学校の旧校舎1階の用務員室に住み込んでいた。強風で破られないよう用務員室の木製の引き違い戸を手でおさえていた。風が落ち着いてきた後に浸水が始まった



図-3 第二室戸台風当時の松茂町付近の浸水状況の再現結果

ので、浸水した渡り廊下を通り、住民が避難していた新校舎2階に移動した。新校舎2階からグラウンドを眺めると、東から船が流れてきて、潮が引くのと一緒に戻っていったのが見えた。旧校舎の屋根瓦が風でたくさん飛ばされた。台風後には先生が屋根に上って、放置しておく危険そうな瓦を落としていた。台風の翌日か翌々日に、市から大きな缶に入った牛乳が避難者用の支援物資として中学校に届いた。その時には既に避難者はいなかったため、中学校前のクリーニング店の方をお願いして住民や沖洲小学校の避難者に配った。

#### (2) 徳島市南沖洲1丁目 I.H.さん(当時小学4年生)の体験談(図-4-④)

昼ごろに屋内の土間に泥水が入って来ているのに気づき、外を見ると側溝から泥水が溢れだしていた。30分くらい経つと、道路は膝下くらいまで冠水していた。父親が、沖洲川が氾濫したのでないかと言うので避難準備をした。両親は子供3人を連れて避難するのは危険と判断し、先に両親と妹弟2人が避難した。避難先は50m離れた徳島市沖洲支所(旧役場)で、私は自宅で父親が帰って来るのを待っていた。自宅が浸水するのは早く、避難するときには既に流れ込んでいたが、敷居まで直ぐに水位が上がり、待っている間、凄く不安だった。父親が帰って来た時にはもう少して床上浸水というところだった。父親は腰くらいまで濁流につかり、足をすくわれないようにしながら背中に私を背負い、私は落ちないように背中に必死にしがみつき避難した。避難途上、知り合いの老人が小さな和船に乗せられて避難していく様子を見て、さらに恐怖を感じた。

避難先の沖洲支所は老朽化の進んだ2階建てで、暴風で揺れ続けたため、恐怖を感じたことを鮮明に覚えている。

支所の窓ガラスから道路の向かい側にある蛭子神社に避難している町民を見ていると大人から「窓ガラスから離れて。物が飛んで来て割れるかもわからない。」と注意されたのを覚えている。

#### (3) 徳島市住吉3丁目 K.T.さん(当時高校3年生)の体験談(図-4-⑤)

中学生の頃から台風に関心があり、毎日テレビを見て天気図を描いていた。第二室戸台風の情報もテレビから得ていて、台風が沖縄の南くらいにある時に中心気圧が900hPaを切っていたため、危機感を持っていた。

台風が最接近する前日の15日から風で戸が飛ばされないように板でくぎ付けし、棒で抑える等の準備をした。風も強かったが、怖さを覚えるほどではなかった。台風が通過して吹き返しの風が吹き始めてから高潮による水が来た。水は家の中まで入ってきて玄関の下駄が浮き出してから見る見るうちに水位が上昇した。



写真-2 当時のK.T.さん宅

床が濡れて畳が水浸しになったところで水が止まったが、どこまで来るまでわからないという怖さがあった。午後2時頃になると空は晴れてきたので、自宅の前で写真を撮った。その時は大人の膝くらいまで浸水していた。夕方頃には水は引いていた。

#### (4) I.Y.さん(当時沖洲学園・園長)の体験談(図-4-⑥)

床上約1メートルも浸水して、暴風雨の中を小舟で避難したが、今思い出してもゾッとする。あ  
のとき、床の節穴から水が吹き上げてきた。

(中略) ある保母さんは、最悪の時はこの子と死を覚悟したということである。

#### (5) K.H.さん(当時沖洲学園の保母)の体験談(図-4-⑥)

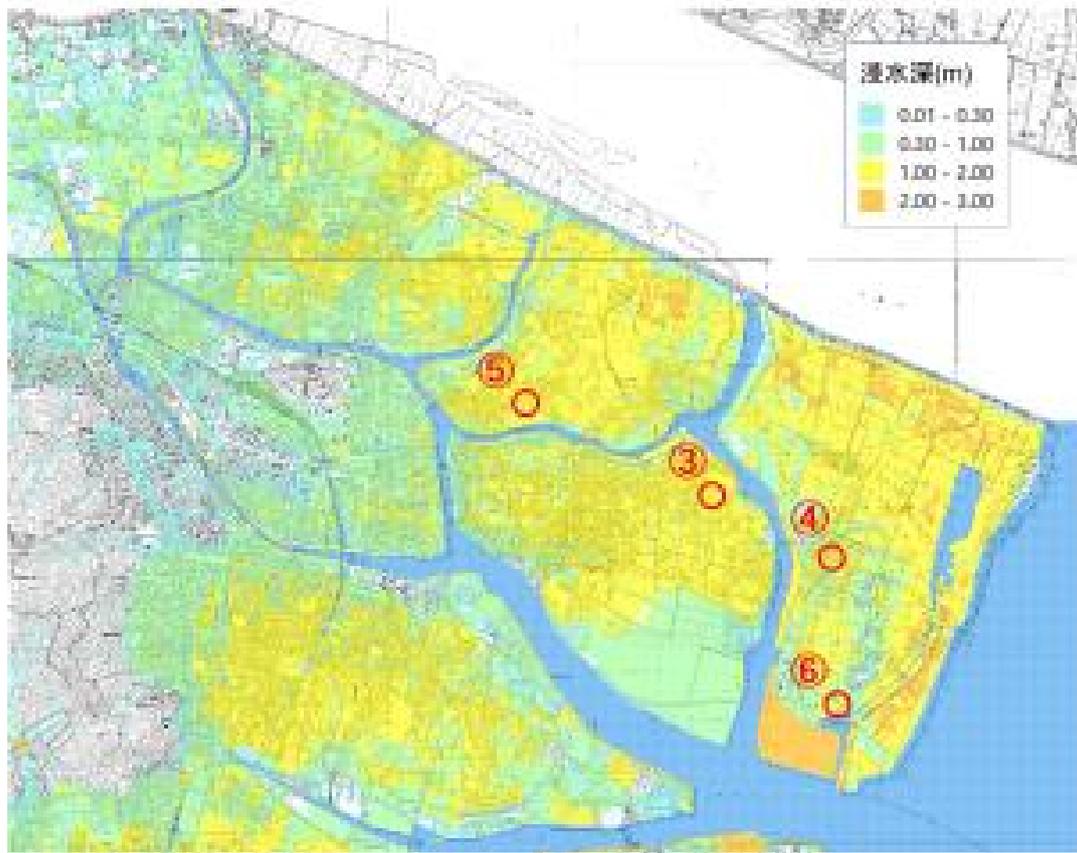


図-4 第二室戸台風当時の徳島市（新町川以北）の浸水状況の再現結果

教室の窓から水が入ってきて、それが講堂にも入り、園児たちを講堂に机を置き、それに座ってもらっていたが、その中に地域の人が船で助けに来てくれ、東側の居室の窓から東側の少し高い道路に待っているバスの中に子どもたち、付き添っている職員たちに乗ってもらい、沖洲小学校に避難した。

なお、(4)と(5)の体験談はおおぎ学園「おおぎ学園20カ年のあゆみ」に掲載された寄稿文より、引用した<sup>3)</sup>。

#### (6) 徳島市昭和町6丁目 M.T.さん（当時大学1年生）の体験談（図-5-⑦）

午前10時頃、家族が経営する種苗店（約30平米、旧国道55号線沿い）の店舗が強風で5~10m飛ばされた。それを見た近所の住民は驚いて昭和小学校に避難を始めた。その時はまだ浸水が始まっていなかったのでスムーズに避難できたそうである。

その後、正確な時間は不明であるが、自宅の南側の市道で東側から浸水し始めたのを見て、自宅敷地内にある養鶏場（約600羽を飼育）の最下段で飼育していた鶏200羽を父親と一緒に三段目に移動させる。移動が終わった時にはひざ位まで浸水していた。水からは油の臭いがしており、後に聞いた話から万代町の油タンクが倒壊したことが原因だったと思う。移動作業完了後に家に戻ると同時に畳が浮き始めたため、畳15枚を2階に運び上げた。

台風が通過した午後には家の前の市道は運河状となり、救護の舟が通るのを見た。一方、旧国道55号線の道路には原木が散乱し、5日ほど通行できない状況が続いた。

#### (7) 徳島市新浜2丁目 Y.K.さん（当時12歳）の体験談（図-5-⑨）

＜津田橋南詰付近にあった自宅近くの船溜まりでの体験談＞

台風の際は川の中通りと呼んでいた船溜まりに上荷船（10mを超えるくらい）が数隻以上避難していた。繋いでいた船が風で揺れて石積みの堤防にあたることで決壊して、南側の芋畑に入ってきた。自宅の畑には3隻、南隣の畑に2隻の計5隻が上がってきたため、危ないところを近くの家の2階に避難した。自宅は床上30cmくらい水が来た。芋畑はいろんなものが飛び込んできた上に、海水が入ったので2～3年は畑としては使えなかった。船溜まりの堤防の他、園瀬川の徳島文理大学の運動場横の堤防も貯木していた原木の筏がぶつかって切れて多数の材木が打ちあがった。

（8）徳島市津田町4丁目 T.K.さん（当時中学1年生）の体験談（図-5-⑩）

父親が警察官で当時は与茂田港前にあった警察官待機所の近くの平屋の木造官舎に住んでいた。台風が来る直前に避難命令が出され



写真-3 万代町付近の堤防決壊により、材木センターから道路に押し流された木材（図-5-⑧）、（徳島新聞社提供）



写真-4 崩れた護岸に土のうを築く徳島東消防署員と地元の消防団員たち、（図-5-⑪）、（徳島新聞社提供）

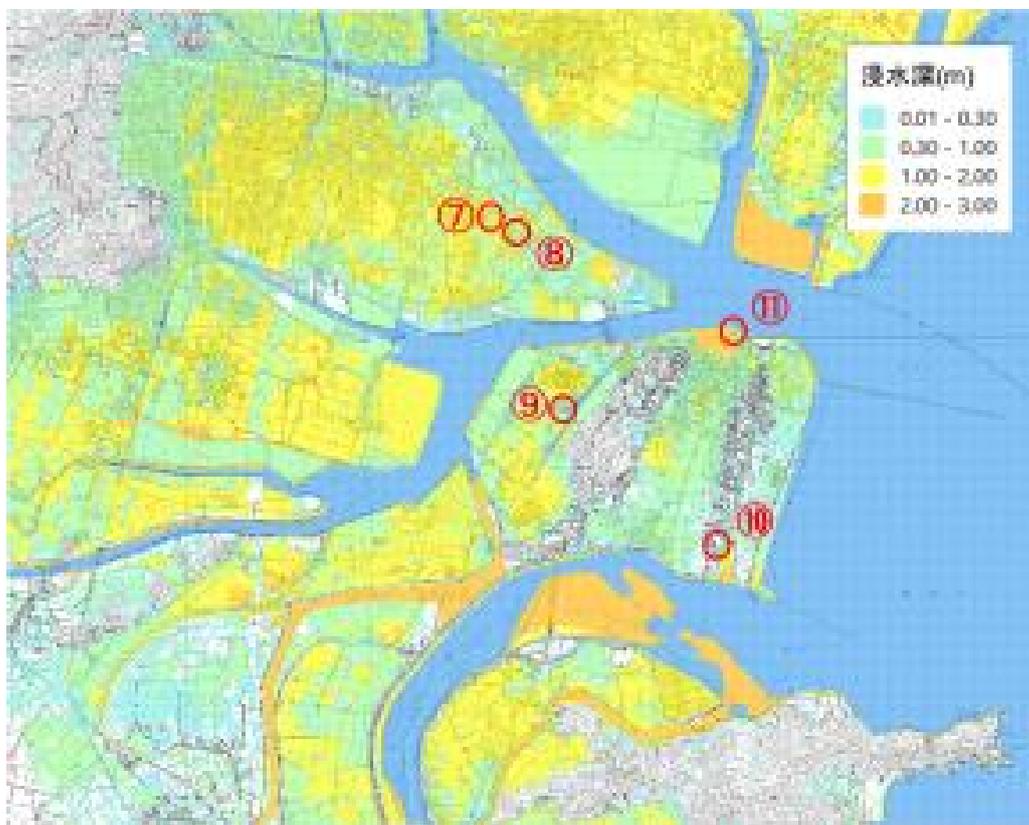


図-5 第二室戸台風当時の徳島市（新町川以南）の浸水状況の再現結果

て迎えに来た警察のトラックに乗って近所の人と一緒に鉄筋校舎の津田小学校に避難した。明るくなりかけた朝早い時間のような記憶がある。台風が収まって自宅に帰ると官舎の玄関先に舳先を向けた漁船が打ち上がっていた。浸水は床上1mくらいだったと思う。そこでは住めないということで新蔵町3丁目の借家に引っ越した。

### 3.3 小松島市

(1) 小松島市元根井地区 S.K.さん(当時20歳で漁師)の体験談(図-6-12)

第二室戸台風の接近に備え、近所の人と一緒に船を家に当たるくらいまで引き上げていたけれど、台風によってほとんど流されてしまった。高潮が上がってきて、波が超えてきたので、高潮の後の浜はもうきれいに何もなくなってしまった。浜にあった網干に干していた網も流されてしまった。

台風が通過した直後には波がシューと引いたら石積みの突堤の上を走って行って波除堤防の内側に係留していた船を取りに行った。途中で波が来たときは堤防に立っていた街灯に掴まって流されないようにした。



写真-5 三条通りの浸水状況  
(図-6-13) (小松島市提供)



写真-6 小松島競輪場の被災状況  
(図-6-14) (小松島市提供)



図-6 第二室戸台風当時の小松島市の浸水状況の再現結果

(2) 読売新聞 昭和36年12月13日「年の瀬の被災地」より<sup>4)</sup>

アッという間のできごとだった。ゴーッというすさまじい音とともに、海水がふくれ上がって町に田に渦巻いて流れ込んだ。「津波だ」との声で外に出た人たちは、すでに避難さえできないことを知った。2階にかけ上がる。水は無気味に目に見えてのし上がってきた。経験したことのない恐ろしさ。こうして12時間水の中に孤立した。

これは第二室戸台風に襲われた小松島市のその日の表情である。瞬時に床上浸水2,604戸、床下浸水1,755戸と目抜き通りはほとんど全滅、全市の半分以上が濁水に洗われ、家財も商品も失ってしまった。

### 3.4 阿南市伊島

(1) 読売新聞 昭和36年12月15日「年の瀬の被災地」より<sup>5)</sup>

700島民が絶対の信頼をかけていた大防波堤が瞬時にして崩壊、伊島は同島始まって以来の大きな被害を受けた。

無残にも食いちぎられた防波堤の残がいを見ただけで、台風の恐怖がどれほどすさまじいものであったか想像できるが、島民がだれ一人として考えてもみなかった延長244メートル、高さ5~3.5メートルの防波堤が崩壊したのは、ちょうど午前9時ごろだった。

10メートルを越すような波が漁協事務所前になだれ込み、気がついてみると防波堤が20~30メートルごとに屏風が倒れるようにひっくり返り、内側の根固めの部分はすっかりとえぐり取られていた。

15日、イセエビが解禁になったばかりの漁民は、明日からの漁に備え、船の手入れやら網の購入など手はずを整え、出漁するばかりになっていたがこの期待もわずか数時間にして消え去り、船だまりにつないであった漁船16隻が消失、19隻が大破したのをはじめ、漁具、船具の流失など漁船関係で1,400余万円、防波堤、護岸の崩壊、埋没など漁港関係で4,200万円、屋根全壊43戸、瓦破損77戸、床上浸水6戸、床下浸水40戸という被害を受けた



写真-7 ヘリコプターから撮影した、被災した伊島の状況  
(徳島新聞社提供)



写真-8 高潮で全壊した北灘町の海産物工場  
(徳島新聞社提供)



写真-9 鳴門市撫養町弁財天付近の様子  
(徳島新聞社提供)

### 3.5 鳴門市

#### (1) 鳴門市撫養町黒崎磯崎 O.S. さん (当時小学5年生) の体験談

家の畳を上げて戸袋の節穴から外に様子を覗いていると前の道路は濁流と変わり、渡船場のドラム缶が流れてきた。路面から40~50cmの深さだった。しばらくすると「にお」(水路)向かいの家の外便所が浮かんだかと思うとぺちゃんこに潰れてしまった。家の中でも暴風雨の音が大音量で聞こえ、茅葺の母屋がゆっくり傾き倒されてしまった。足下の座板が浮き出し、床上まで浸水しそうになった後、一気に水が引いた。のちに「にお」の堤防が切れて塩田に水が一気に流れ込んだので助かったというのがわかった。

### 3.6 阿波市吉野町

#### (1) 徳島新聞 昭和36年9月16日夕刊より<sup>6)</sup>

吉野町水防対策本部は、同町北原の宮川内谷川南岸が濁流に洗われ、決壊の危機にさらされたため午前8時40分、危険区域の北原、姥御前両地区民約100戸(500人)に緊急避難命令を出した。

決壊の恐れのある個所はさる29年の15号台風で決壊した地区の下流で竹ヤブの岸が幅約8メートル濁流にけずり取られ、地元水防隊が土のうを積んで応急対策を講じたが、刻々増水しており、ついに避難することになった。

両地区の婦人、子供、老人らは午前9時すぎから対策本部が町内の土建会社などに頼んで繰り出したダンプカーやオート三輪車で同町の専売公社たばこ収納所と内外物産徳島工場に続々と避難を開始した。避難民たちは横なぐりの風雨をわずかな食糧だけをもって恐怖におびえ、中にはパンツ1枚でトラックに乗り込む子供の姿も見られた。



写真-10 ダンプカーで避難する住民たち  
(阿波市吉野町北原)  
(徳島新聞社提供)

#### (2) 徳島県警察本部「第二室戸台風時における徳島東警察署の警備活動状況」より<sup>7)</sup>

板野郡上板町周辺では、上板町内を東西に縦断している宮川内谷川が川床浅くかつ堤防が低いいわゆる「天井川」のため、上流地域の阿讃山脈の豪雨により一時に出水し、同川の両岸堤防が5か所延750mにわたって決壊・氾濫したため、負傷者126、家屋の全半壊188棟、床上浸水629棟、床下浸水1,200棟と全町の80%に達する被害を受け、特に仁界、上六条、高瀬地区300棟は、水はけが悪く9月19日まで浸水孤立した。

#### (3) 川島町史より<sup>8)</sup>

風雨きわめて強く、その上長時間に及び、吉野川の水位は川島で最大6mに達した。

川島町では、久保田方面で床上5尺(約1.5m)の浸水、軒すれすれとなり、水没する家屋さえ生じ、鉄道も久保田方面で枕木は水没、そのため

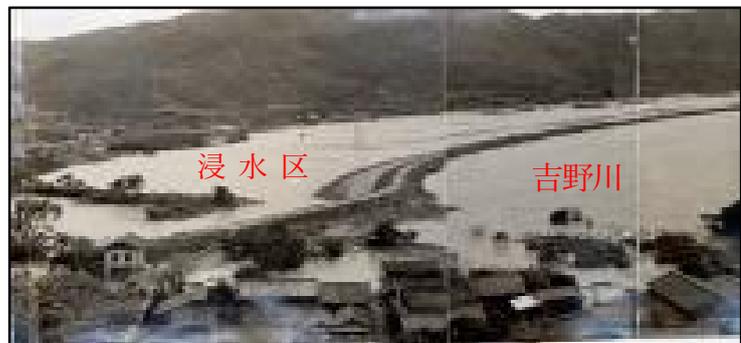


写真-11 第二室戸台風時(S36.9.16 午後4時頃)の岩の鼻から撮影した写真(吉野川市川島町川島)

に17日も終日国鉄徳島線は不通となった。

(4) 徳島新聞(昭和36年9月17日)より<sup>9)</sup>

16日午後2時ごろ、吉野川の氾濫で麻植郡川島町桑村、Kさんら5戸(25人)が2階まで水がきたため、川島署と地元消防団ではてんま船を出し午後5時、2階から全員を無事に救出して川島小学校へ避難させた。

#### 4. 啓発活動

##### 4.1 事前の備えに関する啓発

県民への啓発として第二室戸台風のパネル展を開催するにあたり、当時の体験談や浸水状況に加えて、高潮災害への備えについても、次の5項目に分けて、解説するパネルを作成した。

###### ①高潮災害の特徴を知る

高潮災害の特徴として、「吸い上げ効果」や「吹き寄せ効果」があることや、その他の特徴について解説し、まずは仕組みを知ってもらえる内容とした。(図-7)

###### ②ハザードマップ(高潮と洪水の浸水想定)を確認

徳島県で公表している高潮浸水想定を提示し、自分の住んでいる地域がどのような想定になっているかを確認できる内容とした。また、高潮と津波の最大浸水想定を比較し、徳島県北部の沿岸では、津波より高潮の方がより浸水深が大きくなることを示し、津波への備えと同様に、高潮への備えの重要性を訴えた。(図-8)

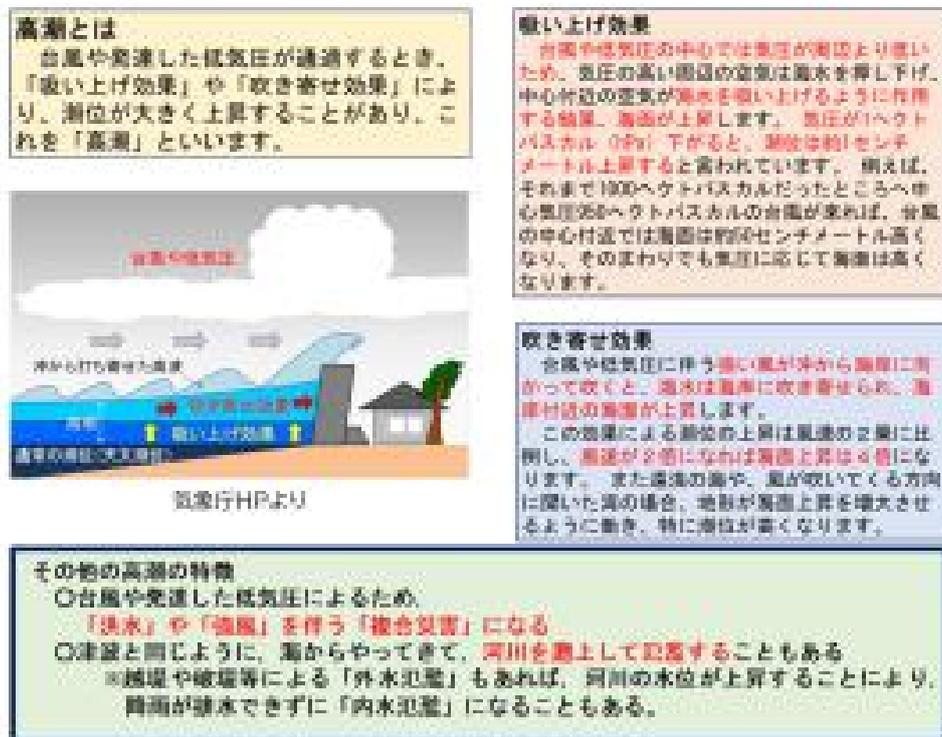


図-7 高潮災害の特徴を解説したパネルの内容

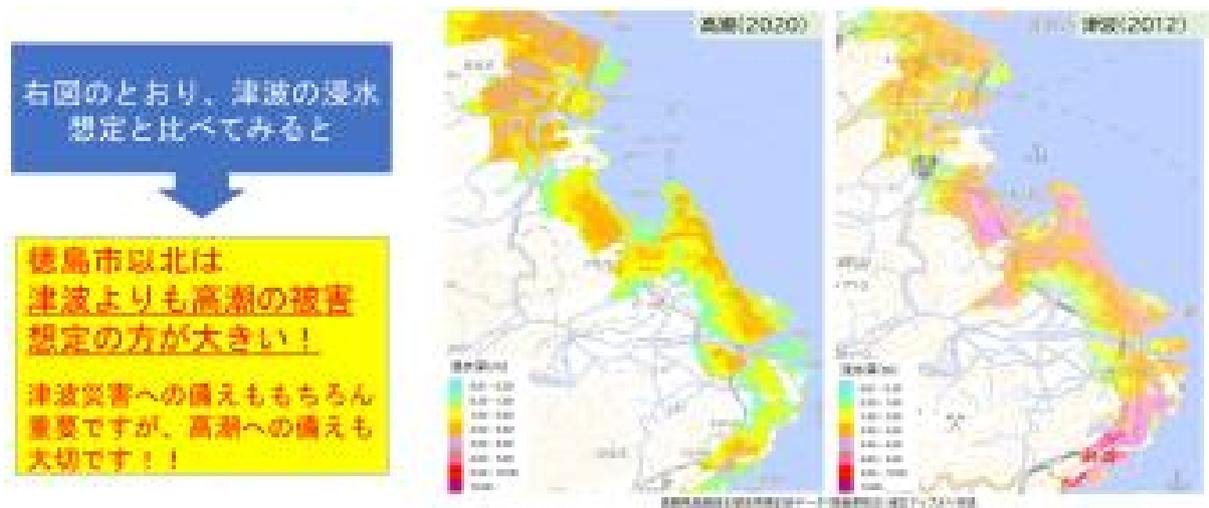


図-8 高潮と津波の浸水想定と比較から、高潮への備えも重要であることを訴えるパネルの内容

表-2 第二室戸台風パネル展及び現地説明会の開催場所・期間・来場者数

会場	開催期間	現地説明会開催日	期間中 来場者数	現地説明会 来場者数
徳島県立防災センター (第1期)	9/16(木)~9/29(水)	9/26(日)	384	10
徳島県立南部防災館	10/1(金)~10/13(水)	10/10(日)	30	22
徳島県立西部防災館	10/15(金)~10/26(火)	10/23(土)	519	5
徳島県立防災センター (第2期)	10/28(木)~11/2(火)	—	278	—
フジグラン北島	11/3(水)~11/7(日)	11/3(水・祝)	150	10
合計	—	—	1,361	47

### ③マイタイムライン（避難行動計画）を作成

災害が起こる前から、自分がいつ、何をやるかの計画（マイタイムライン）を作成しておくことが、災害時の迅速な行動につながることで、マイタイムラインの例を示した。

### ④正確な気象情報を早く入手する

気象庁のホームページや防災アプリ等の情報収集手段を明示することで、どのように正確な情報を入手すればよいか分かる内容とした。

### ⑤暴風雨が始まる前に避難行動

第二室戸台風の例では、徳島市では台風が最接近する約14時間前から強風が吹き始めたことを示し、強風で非難が困難になる前から避難する等、早めの避難の重要性を訴える内容とした。

## 4.2 パネル展と現地説明会

「過去の災害に学ぶ『第二室戸台風』パネル展」と題し、県内4カ所でパネル展を開催し、また、各会場で1時間程度のパネルの現地説明会を行った。

その際の実績については、表-2のとおりである。

期間中に学校の遠足や他のイベントを実施していた県立防災センターやスポーツ施設と隣接し普段から来場者の多い西部防災館、普段から買い物客の利用が多いフジグラン北島に比べ、南部防災館における来場者が少なかった。これは、県南の人口が少ない地域に立地し、特に他のイベント等

が実施されていなかったことが要因と思われる。普段から集客効果のある施設で、より目に留めてもらいやすい工夫が必要である。

## 5. おわりに

今回、資料収集を行う上で、これだけ大きな被害があった、数少ない高潮災害の例であるにもかかわらず、残っている資料は少なく感じた。そんな中、被災したご本人からの体験談を集めることは、当時の状況や経験から学び、次の災害に備える上で、非常に重要なことであると認識した。

また、パネル展のみではなく、今後は、収集した情報を簡単な冊子にまとめ、インターネット上にアップしていつでも見られるようにする等、今後の啓発活動に活用していきたい。

謝辞：体験談をお話しいただいた皆様と紹介いただいた日本防災士会徳島県支部、当時の資料を提供いただいた国土交通省や報道機関等、町内会の皆様に、ここに記して感謝の意を表する。

## 参考文献

- 1) 徳島県：徳島県自然災害誌，平成29年3月。
- 2) 運輸省第三港湾建設局：第二室戸台風における港湾災害調査報告書，昭和37年3月。
- 3) 社会福祉法人徳島県心身障害者福祉会：おおぎ学園20カ年のあゆみ,1975。
- 4) 読売新聞：年の瀬の被災地⑥，小松島市，昭和36年12月13日朝刊。
- 5) 読売新聞：年の瀬の被災地⑧，阿南市伊島，昭和36年12月15日朝刊。
- 6) 徳島新聞：昭和36年9月16日夕刊。3面
- 7) 川島町：川島町史，1982年。
- 8) 徳島県警察本部：第二室戸台風時における徳島東警察署の警備活動状況，昭和36年9月。
- 9) 徳島新聞：昭和36年9月17日朝刊。